

- (2) 人口減少など地域の抱える課題を理解した上で、生徒が地域の魅力を発見したり伝えるための具体的な取り組みができるよう指導する必要がある。

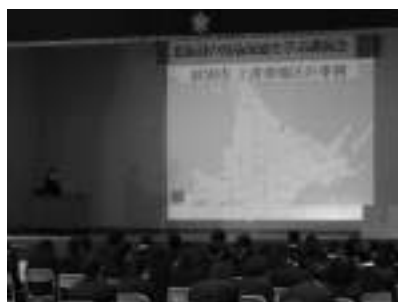


写真28 「北海道の食品流通を学ぶ講演会」の講演の様子

Ⅲ-24 農業や地域の魅力を発見、発信する講演会

1 目 的

- (1) ねらい 本校や地域の農業の魅力の見つけ方、伝え方を学び魅力発信が具体的に実践できるよう指導する。
(2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎表現力 ○思考力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 10月27日（水）
(2) 会 場 北海道静内農業高等学校体育館
(3) 参加者 食品科学科・生産科学科全学年128名
(4) 講 師 北海道放送株式会社コンテンツ制作センター情報制作部プロデューサー 栗山 亘 様
北海道放送株式会社アナウンサー編成局アナウンス部 森 結有花 様
(5) 概 要 「伝えることの大切さ」をテーマとして講演会を実施した。テレビ番組ができるまでの流れや相手へ自分の意思を伝えるポイント等について写真29のように学習した。その内容に基づき、「伝えること」を1分間スピーチや学校の生産物を活用した番組形式で演習した。

3 生徒の感想

- (1) 伝えることを実践してみて、相手に自分の意思を伝えるのがこんなにも難しいとは思いませんでした。
(2) 今回学んだことを活かして、今後の販売会で商品のPRを行おうと思いました。
(3) テレビ番組ができるまでには、とてつもない努力や苦労があることを理解できました。

4 成 果

- (1) 「伝えること」の実践として1分間スピーチや番組形式の演習などを通して、生徒のコミュニケーション能力を高めることができた。
(2) 農業の面白さや新ひだか町の魅力発信の大切さを生徒に理解させることができた。

5 課 題

- (1) 農業の魅力発信について生徒が具体的にに取り組むことができるよう、プロジェクト学習の内容や情報の発信について指導する必要がある。
(2) 新ひだか町の持つ魅力を生徒が数多く理解できるよう、地域理解に関する指導を充実させる必要がある。



写真29 「農業や地域の魅力を発見、発信する講演会」の講演の様子

Ⅲ-25 新しいアグリビジネスを学ぶ講演会

1 目 的

- (1) ねらい 農業の経営や農産物の流通に関する知識を深めるとともに新しいアグリビジネスの内容について知見が広がるよう指導する。

- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎創造力 ○思考力 ○実践力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 11月10日(水)
(2) 会 場 本校体育館
(3) 参加者 食品科学科・生産科学科全学年128名
(4) 講 師 u m a m i l l 株式会社代表取締役ＣＯＯ 松原 壮一郎 様
(5) 概 要 「ＩＴによる新しい食品輸出」と題して講演会を実施した。今後海外市場が重要なマーケットになることや、日本の食品の輸出が他国と比較して少ない現状から輸出を手がけるビジネスを始めたことを学習した。また、食品の輸出を効率的に進めるための電子決済の有効性やu m a m i l l 株式会社が構築したビジネスモデルを学習した。特に飲料計の商品に人気があることや、北海道の商品も海外でヒットしていることなど、実例を挙げていただきながら食品の輸出を身近なものとして写真30のように学習した。

3 生徒の感想

- (1) 日本の人口が減少していく中で国内消費だけを目的にしている収入の増加を見込むことは難しいが、海外に輸出販売できれば、生産者の収益向上につなげることができると感じました。
(2) 貿易が盛んになり自由貿易が伸展すればピンチでもあるが、逆にチャンスでもあると思いました。
(3) メルカリをたとえに「商品の価値は買う側が決める」の言葉が印象的だった。どんなものでも売れそうな気になりました。
(4) 越境ＥＣやＩＴを活用することで350台の高級車が33秒で売れたことに驚きました。
(5) 日本よりも肥満人口の多い国ではヘルシーな日本食が魅力的であることがわかりました。特に日本での朝食のようなラインナップは人気であると知ることができました。
(6) 本校の農産加工品や畜産加工品はおいしいし、小さいので送料もあまりかからなさそうなので輸出してはどうかと思いました。
(7) 「自分の可能性を閉ざさない」という松原先生のメッセージがとても印象的でした。

4 成 果

- (1) 飲料系商品に人気があることや、北海道の商品も海外でヒットしていることなど実例を紹介いただき、食品の輸出を身近なものとして生徒に理解させることができた。
(2) 食品の輸出や電子決済など、農業のグローバル化について生徒が考える重要な機会とすることができた。

5 課 題

- (1) 生徒が生産した加工品を実際に輸出ができるよう、H A C C P等の認証を取得し安全性について第三者認証を取得する必要がある。
(2) インターネットを活用した電子商取引について、生徒が内容や方法を理解して取り組めるよう指導する必要がある。



写真30 「新しいアグリビジネスを学ぶ講演会」の講演の様子

Ⅲ-26 プロジェクト学習

科目「課題研究」では、専攻班別にプロジェクト学習に取り組ませた。地域の農家・企業・団体・学校と連携することで課題解決をより深く掘り下げて取り組むことができた。調査や実験、試作などを通して生徒の職業的な能力を高めることができただけでなく、小学生などに対して既習の知識や技術を活用して講習会や体験学習の機会を企画し、学習内容をより確実に定着させることができた。学んだ知識や技術を生かして各種コンテストや発表会にも参加させることで、写真31のように生徒のプレゼンテーション能

力を大きく向上させることができた。これらを通して、学校農業クラブの発表活動において、生徒が高い成績を収めることにつなげることができた。

プロジェクト学習の取組は、農業や地域の振興に対する生徒の興味・関心を高め、知識や技術を学び、よりよい姿を目指して創造的に取り組ませることができる重要な学習活動であることを認識した。

このプロジェクト学習の充実を図るため、本事業における専門的な知識、技術を有する職業人材との連携により、その効果をいっそう発揮できるよう指導する必要がある。

<参考 令和3年度プロジェクト学習テーマ一覧>

学年	学科	上段：専攻班	研究テーマ
2	食品科学	プラントサイエンス研究班	コミュニティビジネスの提案 ～地域と歩む町おこしプロジェクト～
2	食品科学	農産加工研究班	ハウレンソウでまちおこし(仮題)
2	食品科学	畜産加工研究班	ジャージ乳活用大作戦
2	食品科学	酪農科学研究班	THE 乳質改善 ～乳質改善を目的にした飼養管理の改善～
2・3	生産科学	馬利用研究班	馬産地回復への第一歩 ～子供たちへの馬文化伝承 PARTIV～
3	食品科学	農産加工研究班	トマコンソース完成
3	食品科学	畜産加工研究班	日高が溶け込むカラーバター開発
3	食品科学	プラントサイエンス研究班	ハウレンソウの品種比較(仮題)
3	食品科学	酪農科学研究班	夢と未来を領域展開 ～子供をトリコにする魔法静農3年生編～
2・3	生産科学	園芸研究班	ピーマンの尻腐れ症とがく枯れを解決するための研究
2・3	生産科学	軽種馬研究班	育成馬の騾について(仮題)



写真31 校内実績発表大会(プロジェクト学習の成果発表会)の発表の様子

第4節 教育課程の刷新の方向性を検討・改善(次年度、学校設定科目を設定)

IV-1 教育課程委員会の実施状況

教育課程委員会を6回実施し、教育課程編成に取り組んだ。各学科の教育内容を明確化するとともに、獣医師志望者や4年生大学望者の対応などについて協議した。開催内容は次のとおりである。

回	日 時	内 容
1	4月15日(金)	・学校教育目標、育成したい資質・能力、教育課程編成の方針の確認 ・教育課程案の作成 ・マイスター・ハイスクール事業に伴う教育課程刷新の方向性の検討
2	5月13日(木)	・普通教科・科目の設定 ・農業教科・科目の調整
3	6月2日(水)	・単元配列表(教科横断的な学習計画)の作成 ・獣医師、4年制大学進学希望者への対応 ・農業教科・科目の調整
4	9月8日(水)	・農業教科・科目の調整 ・獣医師、4年制大学進学希望者への対応
5	11月26日(金)	・令和4年度入学生教育課程表の確認 ・令和4年度学年別教育課程の調整
6	2月1日(火)	・令和4年度入学生教育課程表の確認 ・令和4年度学年別教育課程の確認

IV-2 令和4年度入学生教育課程について

第2学年において、学校設定科目「英語研究」(1単位)、「数学研究」(1単位)、第3学年において学校設定科目「英語研究」(1単位)、「数学研究」(1単位)を選択科目として設定する。獣医師志望者や4年制大学志望者に対する学習を強化することを目的として実施する。

食品科学科において、第2学年「作物」(2単位)、第3学年「畜産」(2単位)を減じ、第2学年に学校設定科目「商品開発Ⅰ」(2単位)、第3学年に学校設定科目「商品開発Ⅱ」(2単位)を設定する。学科の専門性を明確にし、「食品製造」「食品化学」「食品流通」「食品微生物」で学んだ知識を活用する目的で実施する。

学校設定科目「デュアル派遣実習」を第2学年(1単位)に設定し、第3学年(1単位)を増単する。新ひだか町内に食品に関わる企業が少ない現状を考慮し、長期休業を活用した実践的な企業実習を行い、社会に有為な人材を育成することを目的に実施する。また、第3学年の選択科目「商品開発」(2単位)を減じ、「畜産」(2単位)を第3学年の選択科目として設定する。6次産業化に対応し、原料生産の基本を学ぶ目的で実施する。

生産科学科において、第2学年の共通履修科目「農業経営」(2単位)を減じ、園芸コースは「野菜」(1単位)「草花」(1単位)を増単して実施する。第2学年の馬事コースは「馬学」(1単位)「馬利用学」(1単位)を増単して実施する。第3学年の園芸コースは「野菜」(2単位)「草花」(2単位)、馬事コースは「馬学」(1単位)「馬利用学」(1単位)を減じて、学科共通履修科目として「農業経営」(2単位)を設定する。園芸コースは「栽培と環境」(2単位)を設定する。教科内における学習の系統性を重視し、年次進行に伴い発展的な内容とすることを目的に実施する。

IV-3 令和4年度学年別教育課程について

第2学年において、学校設定科目「英語研究」(1単位)、「数学研究」(1単位)、第3学年において学校設定科目「英語研究」(1単位)、「数学研究」(1単位)を選択科目として設定する。獣医師志望者や4年制大学志望者に対する学習を強化することを目的として実施する。

食品科学科において、第2学年の選択科目「作物」(2単位)「畜産」(2単位)を減じ、学校設定科目「商品開発Ⅰ」(2単位)を設定する。第3学年の選択科目「作物」(2単位)「畜産」(2単位)を減じて、学校設定科目「商品開発Ⅱ」(2単位)を設定する。「総合実習」(2単位)を減じ、第3学年に選択科目「畜産」(2単位)を設定する。学科の専門性を明確にし、「食品製造」「食品化学」「食品流通」「微

生物利用」で学んだ知識を活用する目的で実施する。

学校設定科目「デュアル派遣実習」(1単位)を第2学年に設定し、第3学年(1単位)を増単する。新ひだか町内に食品に関わる企業が少ない現状を考慮し、長期休業を活用した実践的な企業実習を行い、社会に有為な人材を育成することを目的に実施する。

第3学年の選択科目「総合実習」(2単位)を減じて、「畜産」(2単位)「作物」(2単位)を選択科目として実施する。6次産業化に対応し、原料生産の基本を学ぶ目的で実施する。

生産科学科において、第3学年の選択科目「総合実習」(2単位)を減じ、学校設定科目「栽培と環境」(2単位)を設定する。栽培植物の育成に必要な栽培技術と環境の関わりについて学習することを目的に実施する。

第5節 施設見学及び実習など施設・設備の共同利用(産業界、農業関連施設、大学など)

<食品科学科>

V-1 食のバリューチェーン

1 目 的

- (1) ねらい 農産物や加工食品の保管及び施設、保管中の変化と品質管理につて取り上げ、物流の効率化、安全性の確保、顧客ニーズへの対応など物流システムの合理化について理解できるように指導する。

- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎実践力 ○思考力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 7月8日(木)
- (2) 会 場 国分北海道株式会社帯広総合センター(物流センター)・柳月スイートピアガーデン
- (3) 参加者 食品科学科3学年23名
- (4) 講 師 国分北海道株式会社 物流システム部物流営業課 中村 哲也 様
物流システム部物流運営課 森 智紀 様
- (5) 概 要 国分北海道株式会社帯広総合センターの見学をとおして、物流の実際を写真32のように見学するとともに、物流や卸売の役割や業務、実際に活用される物流機器等について学習した。

3 生徒の感想

- (1) 物流センターは、狭い場所や高い場所でも機械等を有効利用していて、スムーズな流れを作っていることに感動しました。
- (2) 何事も効率、流れをどうしたら良いか考えることが、どのような仕事においても大切であると感じました。
- (3) スーパーやコンビニに陳列される前にすごい工夫がされていて、大変な作業があることを学習できてとても勉強になりました。
- (4) 誰が見ても分かりやすく、効率的に仕事をできるように番号等を振り分け行っているところに驚きました。

4 成 果

- (1) 食品流通における食品の品質管理や物流システムを生徒に理解させることができた。
- (2) 物流や卸売業の役割、実際に使用されている物流機器などの学習を通して、食品業界に対する生徒の関心を高めることができた。

5 課 題

- (1) 見学で得た学びを定着させるため、食品関係科目との関わり合いを理解させるよう生徒に学習させる必要がある。
- (2) 企業の物流をより深く理解するため、様々な業種や業態における物流を学習させる必要がある。



写真32 「食のバリューチェーン」の視察の様子

V-2 原料生産

1 目 的

- (1) ねらい 食品に関する実践的な学習活動を行うため、研究機関と連携を図りながら地域における食品産業の実体を把握し、今後の在り方を考察できるように指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎実践力 ○思考力 ○表現力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 7月26日(月)
- (2) 会 場 農研機構北海道研究センター
- (3) 参加者 食品科学科3学年23名
- (4) 講 師 農研機構北海道農業研究センター研究推進部事業化推進室事業化推進室長 瀧川 重信 様
- (5) 概 要 農業研究施設の役割や研究内容と農業に係わる先進的な技術を写真33のように体験的に学習した。

3 生徒の感想

- (1) 農研機構の方から農業分野では担い手の減少、高齢化の進行等により、労働力不足が深刻な問題になっていることを教わり、私たちがこれからの時代を支えていくことを改めて感じました。
- (2) 圃場を見させて頂いて、農研機構の方が日々どのような取り組みを行っているか知れてとても勉強になりました。
- (3) シストセンチュウの観察や話を聞いて、日々、農業を営む農家の苦労がとても理解できました。

4 成 果

- (1) 担い手不足や、高齢化に伴う深刻な労働力不足に対応した研究などの学習を通して、農業の現状を正しく生徒に理解させることができた。
- (2) 農業の振興に必要な研究や方策について生徒に考えさせることができた。

5 課 題

- (1) 原料生産における課題を本校の食品製造と関連付けるために、本校の加工品に関わる原料についても指導を頂けるよう学習内容を検討する必要がある。
- (2) 原料と製造品の関わりを生徒により深く理解させるため、食品製造分野と原料生産分野を横断的に学習できるよう指導方法を検討する必要がある。



写真33 「原料生産」の授業と見学、演習の様子

<生産科学科馬事コース>

V-3 競走馬の初期育成

1 目 的

- (1) ねらい 子馬の発育、生理や行動的特性、発育と飼育環境の関連性などを理解し、競走馬の初期育成ができるように指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎実践力 ○思考力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 10月15日(金)
- (2) 会 場 日本中央競馬会日高育成牧場
- (3) 参加者 生産科学科馬事コース2学年13名
- (4) 講 師 日本中央競馬会日高育成牧場専門役 遠藤 洋郎 様
日本中央競馬会日高育成牧場診療防疫係長 岩本 洋平 様
日本中央競馬会日高育成牧場研究役 琴寄 泰光 様
- (5) 概 要 競走馬のライフステージと、初期育成と中期育成期における育成方法や糞について写真34のように学習した。これを踏まえ、後半は日本中央競馬会日高育成牧場で飼育している当歳馬の調教を全員が実習した。

3 生徒の感想

- (1) 後期育成の手順と方法について知ることができ、勉強になりました。
- (2) 馬が人に対して従順だったことと、どの馬もそのようにできると聞いて驚きました。

4 成 果

- (1) 競走馬の育成・販売における騾や調教の重要性について生徒に理解させることができた。
- (2) 実践的な実習によって生徒一人ひとりの騾や調教に関する技術を向上させることができた。

5 課 題

- (1) 当歳馬の調教について理解を深めさせるため、馬の調教に関する内容を取り入れた授業展開を検討する必要がある。
- (2) 学習した当歳馬の調教に関する知識や技術を定着させるため、科目「馬学」「課題研究」等の実習させる必要がある。



写真34 「競走馬の初期育成」の授業と実習の様子

V-4 馬の産業

1 目 的

- (1) ねらい 競馬の役割と動向に関する理解を深め、競走馬生産の特性や流通と馬の利用及び需給の動向との関連を理解できるよう指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎判断力 ○表現力

2 授業内容・研修内容

回・日時・場所	参加者	講 師	概 要
第1回 11月1日(月) 日本軽種馬協会 静内種馬場	生産科学科 馬事コース 2学年3学年 28名	産業実務家教員 中西 信吾	日本軽種馬協会の役割や業務内容について写真35のように学習した。研修施設、診療所の施設を見学し、本校繁殖牝馬と交配した種牡馬の展示を実施した。
第2回 11月12日(金) 日本中央競馬会 札幌競馬場	生産科学科 馬事コース 3学年15名	日本中央競馬会札幌競馬場 副場長 勝木 亮司 様	日本中央競馬会の役割や業務内容について学習し、競馬開催における法律やルールについて学習した。札幌競馬場内の施設やコースを写真35のように視察した。

3 生徒の感想

- (1) 競馬が開催される裏側では様々な人が関わっていることがわかりました。
- (2) 普段は見られないバックヤードを見ることができて良かったです。
- (3) 馬の安全や生活を最優先して施設が作られていたことに驚きました。
- (4) 種牡馬を実際に見ることができて、感動しました。

4 成 果

- (1) 競馬に関わる関係団体や施設の様々な役割を生徒に理解させることができた。
- (2) 関係者以外は入ることができない施設や設備の見学することを通して、生徒の関心を高めることができた。

5 課 題

- (1) 学習意欲を高めるために、実施時期を早めるように改善する必要がある。
- (2) 施設見学において、学習効果をより高めるため、参加人数や実施学年を検討する必要がある。



写真35 「馬の産業」の見学の様子(左:日本軽種馬協会静内種馬場, 中央・右:日本中央競馬会札幌競馬場)

V-5 競走馬の繁殖

1 目 的

- (1) ねらい 繁殖牝馬の飼育と管理に関する正確な知識と基本的な技術を身に付けて繁殖牝馬の飼育が適切にできるよう指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎判断力 ○思考力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 11月9日(火)
- (2) 会 場 日本中央競馬会日高育成牧場
- (3) 参加者 生産科学科馬事コース2学年13名
- (4) 講 師 日本中央競馬会日高育成牧場 診療防疫係長 岩本 洋平 様
- (5) 概 要 競走馬の繁殖生理について学習し, 繁殖牝馬の管理方法や栄養管理について写真36のように学習した。これを踏まえ, 実際に繁殖牝馬のエコー検査や直腸検査, ボディコンディションスコアの測定を全員が実習した。

3 生徒の感想

- (1) 減多にすることができない, 繁殖牝馬の直腸検査ができて良かったです。
- (2) 栄養生理の基本について理解でき, 高校で使っていない飼料を知ることができました。

4 成 果

- (1) 馬の栄養の基本や繁殖のメカニズムを学ぶとともに, 繁殖牝馬のエコー検査や直腸検査などの実習を通して, 馬の繁殖や栄養に関する体系的な知識と技術を生徒に習得させることができた。
- (2) 繁殖生理と繁殖管理技術を学び, 繁殖牝馬の飼育管理や繁殖適期における管理内容を生徒に理解させることができた。

5 課 題

- (1) 繁殖牝馬の管理において学習した知識や技術を実践するため, 実施時期を早めるように改善する必要がある。
- (2) 日常の繁殖管理において, 学習した内容を生徒に定着させるため, 教科「馬学」「課題研究」等で反復して実習する必要がある。



写真36 「競走馬の繁殖」の授業と実習の様子

V-6 乗馬

1 目 的

- (1) ねらい 馬の騎乗と基本乗馬に関する正確な知識と基本的な技術を身に付けて, 騎乗技術が向上することができるよう指導する。

(2) 身に付けたい資質・能力 ◎実践力 ○表現力

2 授業内容・研修内容

回・日時・場所	参加者	講師	概要
第1回 10月13日(水) 日本中央競馬会 日高育成牧場	生産科学科 馬事コース 3学年15名	日本中央競馬会日高育成牧場 業務課長 立野 大樹 様 日本中央競馬会日高育成牧場 乗馬普及チーフ 堀 光広 様	J R A職員による乗馬供覧を見学し、乗馬の誘導や調教方法を学習した。これを踏まえ、実際に J R Aの乗用馬に騎乗し、誘導や障害飛越を写真37のように実習した。
第2回 11月5日(金) 日本中央競馬会 日高育成牧場	生産科学科 馬事コース 2学年13名	日本中央競馬会日高育成牧場 業務課長 立野 大樹 様 日本中央競馬会日高育成牧場 乗馬普及係チーフ 堀 光広 様	J R A職員による乗馬供覧を見学し、乗馬の誘導や調教方法について写真37のように学習した。これを踏まえ、実際に J R Aの乗用馬に騎乗し、誘導や障害飛越、馬とコミュニケーションをとる手法として、グランドワークを実習した。

3 生徒の感想

- (1) 障害の正しい飛越姿勢が改めてわかりました。
- (2) 馬の能力の高さに驚きました。
- (3) 整った施設で優良な馬に騎乗でき、得るものが大きかったです。
- (4) J R Aの教官の指導を受け普段、課題となっていることが解決できました。

4 成 果

- (1) 生徒一人ひとりが自己の騎乗技術に関する課題を明確にできたとともに、騎乗技術の向上に取り組むことができた。
- (2) 整った施設で学校での実習よりも多くの実習経験を積むことができ、生徒が乗馬に関する実践的な技術の向上を図ることができた。

5 課 題

- (1) 本授業によって、競走馬の騎乗、乗馬に関わる職業への興味・関心の向上が期待されるため、馬の騎乗を活用する進路選択を生徒ができるように指導する必要がある。
- (2) 乗用馬の体力や騎乗者の安全を考慮し、乗馬指導を受けた生徒数が限られてしまったため、全員が同じ条件で授業が受講できるような実施方法を検討する必要がある。



写真37 「乗馬」の実習の様子(左:10月13日, 中央:右:11月5日)

V-7 馬の利用と調教

1 目 的

- (1) 馬の調教と馬の利用方法について、正確な知識と基本的な調教技術を身に付けて、馬を利用することができるよう指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎創造力 ○実践力

2 授業内容・研修内容

回・日時・場所	参加者	講 師	概 要
第 1 回 10月26日(火) 日本中央競馬会 日高育成牧場	生産科学科 馬事コース 3 学年15名	日本中央競馬会日高育成牧場 専門役 遠藤 洋郎 様 日本中央競馬会日高育成牧場 診療防疫係長 岩本 洋平 様	競走馬のライフステージや後期育成期における育成方法や躾について写真38のように学習した。これを踏まえ、後半は日高育成牧場で飼育している当歳馬の調教を全員が実習した。
第 2 回 11月16日(火) 日本中央競馬会 日高育成牧場	生産科学科 馬事コース 3 学年15名	日本中央競馬会日高育成牧場 場長 石丸 睦樹 様 日本中央競馬会日高育成牧場 乗馬普及係チーフ 堀 光広 様	馬の心理と、競走馬における調教方法について学習した。これを踏まえ、後半は日高育成牧場で飼育している乗馬のグランドワークとジョインアップを全員が写真38のように実習した。

3 生徒の感想

- (1) 初期育成の躾が後期育成の能力に繋がることがわかりました。
- (2) J R A の離乳馬はよく調教がされていて扱いやすかったです。
- (3) 競走馬の育成や販売に必要な調教技術の重要性を生徒に理解させることができました。
- (4) 躾や調教に対する考え方や個体の特性に応じた調教技術を生徒に身に付けさせることができました。

4 成 果

- (1) 競走馬の育成における初期調教の重要性について生徒に理解させることができた。
- (2) 実習環境が整っているなかで、実践的な実習を経験することによって生徒一人ひとりの躾や調教の技術を向上させることができた。

5 課 題

- (1) 調教の技術をより高めるため、乗用馬と競走馬の調教との違いや関連性を理解して実習を行う必要がある。
- (2) 学習した競走馬、乗馬の調教に関する知識や技術を定着させるため、科目「馬学」「馬利用学」で反復して実習を行う必要がある。



写真38 「馬の利用と調教」の実習の様子(左:10月16日, 中央・右:11月16日)

V-8 馬の獣医療

1 目 的

- (1) ねらい 馬の病気と治療について、理解を深め、適切に馬の飼育管理ができるよう指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎判断力 ○表現力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 11月8日(月)
- (2) 会 場 日本軽種馬協会研修センター
- (3) 参加者 生産科学科馬事コース2 学年13名
- (4) 講 師 産業実務家教員 中西 信吾
- (5) 概 要 馬の去勢手術の見学を通して手術時の衛生管理や手順、手術室の装備や使用する機器具の名称等を写真39のように学習した。

3 生徒の感想

- (1) とにかく馬を清潔に消毒し、手術を実施することが大切だとわかりました。
- (2) 手順を理解し、チームで手術を行うことが重要だとわかりました。

4 成 果

- (1) 外科手術の様子を実際に見ることで、獣医療に関する基本的な知識を生徒に理解させることができた。
- (2) 獣医師を志す生徒にとって実際の外科手術を見学することは、貴重な学習機会とすることができた。

5 課 題

- (1) 学習の効果を高めるため、手術に使用する外科器具などの名称を事前に学習する必要がある。
- (2) 獣医師の仕事に関心を高めることができるよう、事前学習により職業理解を深める必要がある。



写真39 「馬の獣医療」の見学の様子

<生産科学科園芸コース>

V-9 日高の農業を知る

1 目 的

- (1) ねらい 地域の農業と環境の実態などの具体的な事例を通じて地域の課題を理解できるよう指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎思考力 ○実践力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 9月21日(火)、22日(水)
- (2) 会 場 9月21日：新ひだか町有田農場、金森農場 9月22日：新冠町今野農場
- (3) 参加者 生産科学科園芸コース2学年3名、園芸コース3学年8名計11名
- (4) 講 師 日高農業改良普及センター 地域第一係長 伊藤 貴人 様
有田農場 有田 英二 様
金森農場 金森 哲也 様
今野農場 今野 道博 様

- (5) 概 要 訪問前に経営概要に関する資料を生徒に配布し、それを元に質問を作成した。視察、当日には事前に作成した質問について確認しながら学習した。また、圃場見学时は生産農家の方から説明を受け、学校の栽培方法と比較しながら栽培農家の実践内容を写真40のように学習した。

3 生徒の感想

- (1) 人手不足という課題を解決するために、自動かん水、クラウドなどのICTを活用しているのはとても参考になりました。実家を継ぐときに是非参考にしたいと思いました。
- (2) 実際の現場での栽培技術を知ることができて良かったです。担当している作物にも応用できるものもたくさんあったので、今後の授業、研究でも活かしていきたいです。

4 成 果

- (1) 学校圃場の栽培方法と比較することで、栽培体系の違いや収量特性の違いを生徒に理解させることができた。
- (2) 労働力不足と労働負荷軽減の対策としてのICTの活用事例の見学を通して、地域農業の実態や課題の解決方法を生徒に理解させることができた。

5 課 題

- (1) 経営に関する説明の理解を深めるために、教科時間内で事前学習に取り組むとともに、他のマイスター・ハイスクール事業で学んだ内容との関連性を整理して視察を行う必要がある。
- (2) 視察によって得られた知識や技術を活用するため、科目「課題研究」におけるプロジェクト学習や教科内プロジェクトの指導内容や手順を整理する必要がある。



写真40 「日高の農業を知る」の見学の様子(左:有田農場, 中央:金森農場, 右:今野農場)

<学科共通事業>

V-10 上級学校を知る(1学年)

1 目 的

- (1) ねらい 農業に関する実践的な学習活動を行うため、大学及び農業大学校などと連携を図り、地域における産業の実態を把握し、今後の在り方を考察することができるよう指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎実践力 ○表現力 想像力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 11月2日(火)
- (2) 会 場 北海道大学農学部キャンパス
- (3) 参加者 食品科学科1学年18名, 生産科学科1学年24名 計42名
- (4) 講 師 北海道大学大学院農学研究院 地域連携経済学 准教授 小林 国之 様
北海道大学大学院農学研究院 教授 石塚 敏 様
北海道大学大学院農学研究院 講師 実山 豊 様
- (5) 概 要 大学の概要について説明を受け、学科別に模擬授業を受講した。その後、研究室を見学し写真41のように大学院生とフリートークを行った。バスによるキャンパス見学では小林准教授から説明を受けた。模擬授業の内容は次の通り。
 - ・食品科学科 「未病の成り立ちを考えるー食べ物で呼ぼうできる芽ー」
教授 石塚 敏 様
 - ・生産科学科 「究極の持続的農法, 自然栽培の畑にて」
講師 実山 豊 様

3 生徒の感想

- (1) 大学はとても広くて驚きました。学習の内容はとても難しかったですが、将来食品関係の仕事に就くのであれば、この内容をわかるようにしなければいけないと思いました。
- (2) 完全無肥料, 無農薬の野菜を作ること, とても手間のかかることなのだと学びました。今後の実習などで今回学んだことを活かしていきたいと思います。大学の授業はとても楽しそうで、進学したいなと思いました。

4 成 果

- (1) 学内や研究室の見学, 模擬授業を通して, 大学の概要や農学部の研究内容について生徒に理解させることができた。
- (2) 大学院生との交流を通して, 卒業後のキャリア形成について生徒に考えさせる貴重な機会とすることができた。

5 課 題

- (1) 視察の効果を高めるため, 大学で学ぶことの意義や大学の歴史等に関する事前学習を行う必要がある。
- (2) 進路意識をより高めるため, 自己のキャリアプランニングについて事前に十分考えて視察に望むよう事前指導を行う必要がある。



写真41 「上級学校を知る(1学年)」の模擬授業、見学、大学院生との交流の様子

V-11 上級学校を知る(2学年)

1 目的

- (1) ねらい 農業に関する実践的な学習活動を行うため、大学及び農業大学校などと連携を図り、地域における産業の実態を把握し、今後の在り方を考察することができるよう指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎思考力 ○創造力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 3月10日(木)～11日(金)
- (2) 会 場 北見工業大学、北見薄荷記念館
- (3) 参加者 食品科学科2学年20名、生産科学科2学年16名 計36名
- (4) 講 師 北見工業大学 教授 村田 美樹 様
- (5) 概 要 地域第一次産業の持続発展に向けてという題目の講義を写真42のように聴講し、地域第一次産業の発展に必要なデジタル化や工業化について学習した。また、研究室見学ではAI培地やロボット収穫機械、牛尿発酵液の有効活用について、大学生から説明を受け、交流を深めながら学習した。

3 生徒の感想

- (1) 北見工業大学の視察を通し、工業と農業には意外と繋がりがあると感じた。また、工業の知識も農業に大いに生かせることを知りました。今後農作業などの機械化についても学習を深めていきたいと思いました。
- (2) 工業大学の研究の中にも私たちの学習していることとリンクしているところがあったので今回学習したことを今後に生かしていきたいです。
- (3) 研究班で取り組んでいる活動をデジタル化し、活動効率を上げて行きたいと思いました。
- (4) 北見と薄荷の歴史について学習を深めることができ、地域ならではのブランド化や商品化の方法について学習を深めることができました。

4 成 果

- (1) AI培地やロボット収穫機械、牛尿発酵液の有効活用等、農業と工業の関わりについて生徒に理解させることができた。
- (2) 地域の第一次産業の発展に必要な技術について生徒に理解させるとともに、大学生との交流を通して卒業後のキャリア形成について生徒に考えさせる貴重な機会とすることができた。

5 課 題

- (1) 視察における学習効果を高めるため、プロジェクト学習における指導助言や発表の場とするなど、視察内容を検討する必要がある。
- (2) 農業の研究開発における大学の役割を学習し、生徒が目的意識を明確にして研修に臨めるよう事前指導を行う必要がある。



写真42 「上級学校を知る(2学年)」の模擬授業、見学の様子

V-12 eコマース

1 目 的

農業分野において、インターネットを事業に活用し地域で活躍できるデジタル人材を育成するため、ヤフー株式会社の通販サイトを通じて、ふるさと「新ひだか町」の特産物や本校の学校農場生産品等の情報発信や販売の方法等を学ばせる実践的教育に取り組み、地域に先駆けたビジネスモデルを創り出すとともに新ひだか町経済の活性化を図るよう指導する。

2 対象生徒 食品科学科2学年24名、生産科学科2学年16名計40名

3 プログラムの開発と実践

(1) 1年間の学習プログラムは、ヤフー株式会社SR推進統括本部の皆様と連携し、立案した。

(2) 実際の指導に当たっては、ヤフー株式会社SR推進統括本部と連携し授業の計画を立案し、本校教諭が指導した。

4 授業内容・研修内容

回・日時	講師，授業者	内 容	身に付けさせたい 資質・能力
第1回 7月29日(木)	ヤフー株式会社 SR推進統括本部 旭 慎太郎 様	「オリエンテーション」 ・講話(eコマースについて講師より講話) ・グループ活動①(チーム力を高める演習) ・グループ活動②(EC管理ツールに関する演習)	◎思考力 ○判断力
第2回 8月30日(月)	教諭 田中 彩佳 教諭 三浦 創	「商品を理解する」 生産者へ電話でインタビューをする。 ・グループ活動①(生産者について深く知る演習) ・グループ活動②(商品の質問事項を考える演習) ・グループ活動③(生産者から商品情報を聞く演習)	◎実践力 ○表現力
第3回 9月14日(火)	教諭 田中 彩佳 教諭 三浦 創	「商品撮影技術を学ぶ」 ・視聴(動画にて撮影技術の学習) ・グループ活動①(商品の写真構図を考える演習) ・グループ活動②(商品写真の撮影)	◎創造力 ○実践力
第4回 9月28日(火)	教諭 田中 彩佳 教諭 三浦 創	「消費者に伝わる文章を学ぶ」 ・グループ活動①(生産者から集めた情報を整理する演習) ・グループ活動②(どう伝えるかをテーマに商品ページを作成する演習)	◎表現力 ○創造力
第5回 11月2日(火)	ヤフー株式会社 SR推進統括本部 旭 慎太郎 様	「マーケティングを学ぶ」 ・講話(マーケティングについて講師より講話) ・グループ活動①(ターゲットを設定する演習) ・講話(ターゲットについて講師より講話) ・グループ活動②(ターゲットを意識した文章の作成演習)	◎表現力 ○創造力
第6回 11月10日(水)	教諭 田中 彩佳 教諭 三浦 創	「作成内容を振り返る」 ・グループ活動(今までの学びから商品ページを振り返る演習)	◎創造力 ○実践力
第7回 11月17日(水)	教諭 田中 彩佳 教諭 三浦 創	「販売内容の最終確認をする」 ・グループ活動(作成した商品ページの見直し)	◎判断力 ○創造力
第8回 1月18日(火)	教諭 田中 彩佳 教諭 三浦 創	「成果をまとめる」 ・グループ活動(商品ページの閲覧数などの情報から、今回学んだことをまとめる)	◎判断力 ○創造力
第9回 2月9日(水)	ヤフー株式会社 SR推進統括本部 旭 慎太郎 様 大塚 高伸 様	「成果発表」 ・写真43のように各班まとめた成果を発表し、講師より講評をもらう。	◎表現力 ○実践力

5 生徒の感想

- (1) e コマースと聞くと私たちの生活とは関係ないように感じていましたが、ネットショッピングのことだということが知ることができ、勉強になりました。自分たちで販売する商品のページを作成して、実際に販売するのがとても楽しみです。
- (2) 実際に販売する商品の情報は、HPで確認していたものの、実際に生産者の方と話をしてみると、商品ができた背景や想いを深く知ることができ、自分自身が購入してみたいと思いました。
- (3) 自分たちで担当している商品は、大人から子供まで幅広く受け入れられやすい商品だと思ったので、商品ページも幅広い年齢層向けに作成していましたが、ターゲットは必ずしもぼって、ページを作成した方が見る人にはわかりやすいものになることがわかりました。
- (4) それぞれ、班によって力を入れる部分が違って面白いと思いました。今回学んだことを将来に活かしていきたいです。
- (5) 写真の撮影の方法など、新しい発見をすることができました。文字で相手に伝えることの難しさを改めて認識しました。
- (6) 1年間この授業を受けて、自分たちが普段なにげなく利用しているECサイトは、様々な工夫がされていることを学ぶことができました。

6 成 果

- (1) 商品紹介用の写真撮影や紹介文書の作成などを通して、インターネットショッピングサイトを活用した商取引について実践的に生徒に学ばせることができた。
- (2) 新ひだか町観光協会と連携してショッピングサイトを開設し、実際の販売活動を通して、地域資源の魅力を生徒に再発見させることができた。

7 課 題

- (1) 学習の成果が継続して発揮できるよう、新ひだか町観光協会との連携を密にし、ネットショップを継続的に運営できるよう取り組む必要がある。
- (2) 地域資源の魅力について、さらに深く、広く理解できるよう、他のマイスター・ハイスクール事業との関連性を整理して指導を進める必要がある。



写真43 「eコマース」の成果発表会の様子

V-13 国際交流

1 目 的

- (1) ねらい 生徒が英語に触れる機会を充実させ、実際のコミュニケーションの場面を通して学習上の動機付けとなるよう指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎想像力 ○実践力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 10月から毎月2～3回程度の交流を随時実施
- (2) 方 法 オンライン
- (3) 参加者 食品科学科1学年18名、生産科学科1学年24名
- (4) 相手校 米国ケンタッキー州レキシントン市ラフィエット高校1年生65名
- (5) 概 要 本校の所在地である、新ひだか町の姉妹都市レキシントン市の高校生と英語および日本語を用いた交流を写真44のように行う。本校生徒1名に対して、相手校の生徒1～2名がカウンターパートになり、身の回りのことや学校生活など様々なトピックについて話し合う。なお、交流相手校は本校英語科において、今年度新たに開拓した。

3 生徒の感想

- (1) 少しずつコミュニケーションをとることができるようになりました。
- (2) お互いにファーストネームで呼び合うことで親近感を感じるようになり、英語によるコミュニケーションが身近なものになりました。

4 成 果

- (1) 教育用SNSプラットフォームを利用したオンライン交流を行い、定期的にビデオメッセージを交換することで、英語を活用したコミュニケーションへの生徒の関心を高めることができた。
- (2) クリスマスカードや年賀状の交換を通して、グローバルな視点から文化の違いを理解することの大切さを生徒に実感させることができた。

5 課 題

- (1) 英作文を行う際や動画を撮影する際に時間がかかり過ぎてしまう生徒がいるので、英語学習におけるインプットやアウトプットの機会をより多く設ける事で、生徒の英語運用能力や対応力を向上させる必要がある。
- (2) 作った文をただ読み上げるという活動になってしまわないように、どのようにすれば相手によりよい形でものごとを伝えることができるかを強く意識させる必要がある。
- (3) 活動をより充実させるため、農業の各科目と連携するなど教科横断的な活動を取り入れていく必要がある。



写真44 「国際交流」のビデオメッセージの撮影、受信の様子

V-14 異文化理解

1 目 的

- (1) ねらい 外国語を通じたコミュニケーションの方法と意味について、実際にどのように用いられているかを知り、英語学習の動機づけとなるよう指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎判断力 ○実践力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 11月11日(木)
- (2) 会 場 本校視聴覚教室(対面・ワークショップ形式)
- (3) 参加者 食品科学科2学年24名、生産科学科2学年16名 計40名
- (4) 講 師 北海学園大学経営学部教授 内藤 永 様
- (5) 概 要 「グローバル企業ではどのような英語が使われているの？」をテーマに、実際のコミュニケーションで使われる最も重要なことを学んだ。流ちょうな英語を話すことより、様々な方法で相手に自分の考えを正しく伝えることの大切さと、コミュニケーションのマインドセットの作り方について写真45のように2マス英会話を通じて体験した。

3 生徒の感想

- (1) 大学での学問に興味を持ちました。
- (2) とても分かりやすく、自分にも英語でコミュニケーションが取れそうと思いました。

4 成 果

- (1) 2マス英会話を実践やワークショップ形式で自分の考えを伝える授業を通して、流ちょうな英語を話すことよりも、様々な方法で相手に自分の考えを正しく伝えることの大切さを生徒に学ばせることができた。
- (2) コミュニケーションのマインドセットの作り方を学び、英語を活用したコミュニケーションに対する生徒の関心を高めることができた。

5 課 題

- (1) 生徒の学力や学習意欲向上のため、2マス英会話や講義で学んだ内容を授業にも取り入れ、普段の英語学習とリンクさせる必要がある。
- (2) 大学教授の講義を聴講しただけで終わらせるのではなく、進路指導部と連携をするなどしてキャリア教育における視野を広げるための機会とする必要がある。



写真45 「異文化理解」の演習の様子

V-15 農業分野の国際協力

1 目 的

- (1) ねらい 農業科目で学んでいることがどのように世界で役立っているかを知り、学びの深化に結び付けることができるように指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ○判断力 ◎想像力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 1月25日(火)
- (2) 会 場 視聴覚教室
- (3) 参加者 食品科学科2学年24名、生産科学科2学年16名 計40名
- (4) 講 師 元JICAシニアボランティア 五十嵐 龍夫 様
- (5) 概 要 「World Study パラグアイでのボランティア・生活・文化」をテーマに、講師がどのようなボランティアを行ったのかを写真46のように学習した。また、JICAの海外ボランティアについてやパラグアイの農業や食文化等、生徒達は普段触れることのない世界を学習した。

3 生徒の感想

- (1) 海外で農業ボランティアをすることは、日本の農業以外の知識が増えるし、それを持ち帰ることで日本の農業をもっとより良くできるきっかけにもなるから、とてもいいことですし、憧れます。
- (2) パラグアイは想像より土地が広大で、それに伴って大豆の生産量も多かったのが印象的でした。

4 成 果

- (1) 農業を学ぶことで広がる自己のキャリア形成について生徒に考えさせることができた。
- (2) 英語を学ぶこと、農業を学ぶことの重要性をグローバルな視点の中で考えることを通して、生徒の学習意欲の向上を図る貴重な機会とすることができた。

5 課 題

- (1) 生徒に講義の内容を定着させるため、パラグアイや海外の農業について事前学習を行う必要がある。
- (2) 講師の声が全体に届かない場面が多くあったので、マイクを使用するなど会場設営の面で改善の必要がある。



写真46 「農業分野の国際協力」の授業の様子

4 成 果

- (1) ミニトマト、ピーマン、デルフィニウムの栽培特性について学ぶとともに、本校の栽培圃場において栽培方法や生育状況を評価することで、栽培上のポイントや課題を生徒に理解させることができた。
- (2) 今後、主力となる作型や栽培方法や新しい農業資材等を学習し、栽培に関するものの見方や考え方を生徒に深めさせた。また、生徒は課題解決に取り組む態度を養うことができた。

5 課 題

- (1) ミニトマトは3学年の栽培作物だったため、2学年の基礎知識が不足していた。生徒の学習活動と本プログラムがリンクするよう、各学年の授業内容を検討する必要がある。
- (2) プロジェクトとの連携を深めるため、生徒が日頃のプロジェクト学習での質問や疑問を整理し、講師と対話的に深く学習できるように指導方法を改善する必要がある。



写真24 「地域園芸の特性と栽培技術」の授業の様子(左: 8月23日, 中央: 9月7日, 右: 9月14日)

Ⅲ-20 G A Pを活用した生産工程の管理

1 目 的

- (1) 農業生産工程管理(GAP)などに基づく野菜の栽培と管理との関連から捉える学習活動により、将来の持続的経営に生かすことができるように指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎思考力 ○表現力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 9月17日(金), 10月11日(月)
- (2) 会 場 特別教室4
- (3) 参加者 2学年園芸コース3名
- (4) 講 師 日高農業改良普及センター 主査(情報・グリーン・有機) 小林 佐代 様
- (5) 概 要 G A Pの目的, 5つの観点について実際の取組事例を見ながら学習するとともに, G A Pに関する問題を解きながらG A P導入の進め方について写真25のように学習した。

3 生徒の感想

- (1) 学校でG A Pを取得しているのは知っていましたが, 具体的に何をしているのか知らなかったので今回学ぶことができて良かったです。
- (2) G A PとS D G sには関係性があることを初めて知りました。良い農業経営をしていくためにもG A Pは大事なものだとなりました。

4 成 果

- (1) G A Pに基づいた体系的な栽培管理の重要性を生徒に理解させることができた。
- (2) 生産性向上や農業経営の発展に生徒が関心を高める機会とすることができた。

5 課 題

- (1) 本校圃場をモデルにしながら重要管理点などを学べるよう, 授業内容を検討する必要がある。
- (2) 収穫, 出荷における重要管理点を学び, 食品の安全, 労働の安全, 環境の安全について理解するために, 実施時期を検討する必要がある。

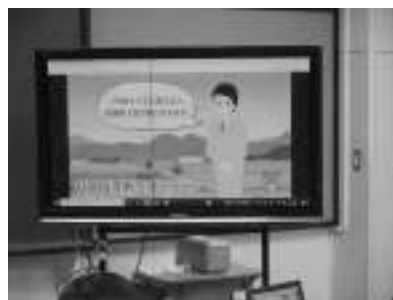


写真25 「G A Pを活用した生産工程の管理」の授業の様子(左: 9月17日, 中央・右: 10月11日)

Ⅲ-21 農業の起業計画

1 目 的

- (1) ねらい 農業生産工程管理（GAP）などに基づく野菜の栽培と管理との関連から捉える学習活動により、将来の持続的経営に生かすことができるよう指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎思考力 ○表現力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 9月29日（水）
- (2) 会 場 視聴覚教室
- (3) 参加者 生産科学科3学年22名
- (4) 講 師 JAしずない営農部営農課長 佐藤 武彦 様
- (5) 概 要 新規就農に向けた研修や体験、営農費用などについて北海道農業担い手育成センターの資料を活用して写真26のように学習した。

3 生徒の感想

- (1) 新規就農の初期費用がどれくらいなのか、経営が軌道に乗るまでの資金はいくら必要なのか等、具体的金額を知ることができました。大きな金額だが支援金や貸し付けの補助も充実していることがわかりました。
- (2) 新規就農の支援策がこんなにしっかりしているのはすごいと思いました。今すぐではないが、将来的に就農するという道に興味を持ちました。

4 成 果

- (1) 新規就農するための初期投資や助成制度、研修制度と、新規就農者の就農までの道のりを事例を通して生徒に理解させることができた。
- (2) 生徒の就農意欲を高める重要な学習ができたとともに、担い手不足など農業が抱える課題の解決策を生徒に考えさせることができた。

5 課 題

- (1) 生徒の就農意欲をさらに高めるためにも、事後学習として各農業教科にて経営に関わる学習、新規就農事例を取り入れるように改善する必要がある。
- (2) 経営感覚を高めるため、経営の分析項目や方法について授業に採り入れて実施する必要がある。



写真26 「農業の起業計画」の授業の様子

Ⅲ-22 新たなアグリビジネスへの取組

1 目 的

- (1) ねらい 次世代の農業に関する技術、取組の具体的事例を通して、地域園芸において適切に技術を扱うことができるようにする。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎創造力 ○思考力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 11月9日（火）
- (2) 会 場 特別教室3
- (3) 参加者 生産科学科園芸コース2学年3名
- (4) 講 師 日高農業改良普及センター主査（高付加価値化） 菊地 紀代美 様
- (5) 概 要 北海道、日高管内で行われている六次産業化による高付加価値化の事例について写真27のように学習した。

3 生徒の感想

- (1) 身の回りにある農家販売所も六次産業であるとは知りませんでした。今後は作るだけでなく、その後のことをしっかり考えるのが大切だと感じました。
- (2) 付加価値をつけて札幌駅にお店を出している農家がいるのは驚きました。新ひだか町にも同じぐら

い可能性を秘めているものはあるなと思いました。

4 成 果

- (1) 地域農業で活用が期待される高付加価値化の取組について生徒に理解させることができた。
- (2) 新ひだか町内における農業の6次産業化に関する具体例を学ぶことで、農業経営における高付加価値化の重要性を、生徒に理解させることができた。

5 課 題

- (1) 食品科学科とも連携し、原材料生産、高付加価値化について理解を深めることができるよう指導方法を改善する必要がある。
- (2) 地域の6次産業化についてより理解を深めるために、視察研修に取り組む必要がある。



写真27 「新たなアグリビジネスへの取組」の授業の様子

<学科共通事業>

Ⅲ-23 北海道の食品流通を学ぶ講演会

1 目 的

- (1) ねらい 顧客の求めている価値やニーズ、消費動向の把握などを取り上げ、顧客の視点に立った食品マーケティングの概要を理解できるよう指導する。また、食品のブランド化の意義について、取り上げ、地域の農産物をブランド化する方策について考察できるよう指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎思考力 ○想像力

2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 令和3年10月21日(木)
- (2) 会 場 北海道静内農業高等学校 体育館
- (3) 参加者 食品科学科・生産科学科全学年128名
- (4) 講 師 株式会社セコマ 代表取締役会長 丸谷 智保 様
- (5) 概 要 「北海道の食を支えるー既成概念にとらわれないビジネスモデルー」をテーマとして講演会を実施した。顧客のニーズを考え地域の農産物をブランド化するためには、具体的にどのような取組が必要か、セコマグループの取組を事例に写真28のように学習した。また、地域に密着したサプライチェーンを確立するために、原料の調達からの過程について学習した。

3 生徒の感想

- (1) セコマ特有のお手頃価格は、食品ロス削減をして、規格外品の有効活用をすることで実現していることを学習できました。地域に貢献する想いを聞けて、とても勉強になりました。
- (2) 少しでも食品ロスが生まれないように努力していることを知ることができました。自分たちが製造する時もこのような考えを持ち、実習に取り組む必要があると感じました。
- (3) 地域の課題に向き合って真剣に解決しようとしていることがとても伝わってきました。
- (4) 地域の人のニーズを聞き取り、それに合わせた品揃えをする重要性を学ぶことができました。

4 成 果

- (1) 地域の課題解決に地域の方と一緒に取り組んでいること、規格外品の有効活用を図ることで食品ロス削減を実現していることなどを学習し、地域貢献に対する企業の取組を生徒に理解させることができた。
- (2) 人口減少など地域の抱える課題にどのように取り組むべきか、生徒が自分のこととして考える重要な機会とすることができた。

5 課 題

- (1) 地域の課題解決について農業高校生としての視点からどのような取り組みができるか、生徒それぞれの考え方を共有できるようにする必要がある。